
革命戦記 アルマゲマキナ

木国 多夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命戦記 アルマゲマキナ

【Nコード】

N1508Z

【作者名】

木国 多夢

【あらすじ】

古の地獄……。

人の悪を育て、その邪な魂を糧とする悪魔。かつての地獄はそんな悪魔たちの住処だった。

長い、長い間……。

しかし、それを良しとしない「違う」悪魔たちがいた。

彼らは古い悪魔を封印追放した。

そうして理性と秩序の守られる新しい地獄が作られたのだ。

プロローグ（前書き）

この小説は独自の解釈が多く含まれています。
気を付けてください。

原作の設定と多少違うところもあるかもしれません。

誤字脱字は報告してください。
感想よろしく願いますw

プロローグ

……もう300年以上前の話になる。

かつて悪魔はひとつだった。

新しいも古いもなく、ただ人間の負の感情を喰らうだけの存在だった。

しかし、それは清く正しい悪魔の在り方だった。

人間が人間界で邪な感情を育て、冥界では悪魔がその感情を喰らい、天界が人間界に還す。

それは本来の魂が循環する仕組みだった。

しかし悪魔は、人間界で人の悪を育てることですらなる力を得ようとした。

悪魔に欲が目覚めた瞬間だ。

そうなると未熟な悪魔達は止まることを知らなかった。

やがて人間界、冥界、天界のバランスが崩れはじめ、それは深刻になりつつあった。

……このままではいけない。

そうして立ち上がったのが悪魔の中でも取り分け知性の高い我々、「インテリジェント」という種族。後に新悪魔と呼ばれる種族だった。

インテリジェントは各地でそれぞれに活動し、なおも欲を抑えられない悪魔に立ち向かった。

それがアルマゲマキナとして語られる大革命の始まりだった。

……アルマゲマキナの戦いは何百年もの間続いた。

しかし、インテリジェントはそれほど優勢ではなかった。
インテリジェントは知性は高かったが、他の種族より圧倒的に力
と数で劣っていたのだ。

しかもインテリジェントの懸念する魂循環システムの崩壊は、知
性の低い他の種族には理解できなかった。

そのこともあって、お互いに理解できない、滅ぼし合うだけの戦
いが長く長く続いていた。

「おい、スカール。」

スカールと呼ばれた少年は野原に生い茂った柔らかな草の中から起き上がった。

少年と言っても、彼は悪魔。その容姿は人間とは違いまがしい二本の角が立ち、身体全体は紅く染まっている。

「ボク達は何をしているんだらうな？」

そう言う彼は何故か朱い空を見上げている。
いや朱い空の境界線の向こうには人間界がある。
彼があちら側を見ているのだとすぐに分かった。

「人間の魂を喰らって、喰らって喰らって…。その先に何があるんだらうな？」

スカールはとっさにはその哲学的な質問に答えることができなかった。

考えたこともなかったからだ。

「どうしてそんなことを？」

「何かあるのなら、その先を見たいとは思わないか？」

魂を喰らってその先…。

「ボクと一緒に来ないか？」

そう言ってその悪魔は手らしき部位をスカールに差し出した。

スカールにそれを承諾する理由はない。しかし拒否する理由もない。

スカールはその手を取って、立ち上がった。

「なかなか面白そうだ。」

それが英雄スカールと天才フォルテのコンビ結成の瞬間だった。

スカールによる実証もあり、フォルテの研究は順調に進んでいた。

しかし、研究が進むに連れて分かってきたことはとてもいいものではなかった。

今のように人の悪を育てながら魂を循環させると、そのうち循環機構は破滅してしまうことが明確になってきたのだ。

それはとても単純なことで、魂に悪がない状態というのはとても高いエネルギーを持っているということだ。

エントロピーにより天界でもとの状態に戻すことができずに人間界に帰されると人間界の悪はより多くなる。

そして悪魔がさらに人間の悪化を加速させると、魂全体が悪になっ
てしまい、三界共に破滅してしまう。

スカールとフォルテは即座にこの情報を発信したが、この情報を理解できるのは自分たちと同程度の知性を持つインテリジェントだ

けだった。

その他の悪魔たちは聞く耳を持っていなかった。何より自分のことを一番に考えていたからだ。

そして自分たちの行動を制限しようとするインテリジェントを攻撃してきた。

「おいフォルテ。」

「ああ、分かっている。」

何をすべきか。

分かり合えず、敵となるならば戦うしかあるまい。

「なぜボク達は分かり合えないのだろうか？」

スカールはその質問には答えることができた。

「それは自分達の中に彼らが入っていないなかったからだ。彼らは本物の悪魔だ。そして俺達は新しい別の悪魔なんだ。」

「結局ボクができることなんてそんなものか。」

フォルテは悔しそうに草を引きちぎって投げ捨てた。

彼にしてみればあの報告はただの警報だったのだ。それが戦争につながるとは思えない。

「フォルテ、お前は何も悪くない。」

「スカール、お前はこんなボクにもそう言うんだな。」

スカールはフォルテにその手を差し出した。

「一緒に戦おう。俺達は三界を救わなければならない。」

プロローグ（後書き）

更新はおそらく一週間にいっぺんのスローペース。

長くなりそうなので、途中で力尽きるかもしれないがなるべく頑張るのでよろしく願います！

1 - 1 作戦会議（前書き）

今回はかなり短め！

というかあんまり上手く書けなかった。

w 自分の頭が悪いせいで「フォルテは天才」という設定が生かせない

1 - 1 作戦会議

戦争が始まって百年程経った頃の話だ。
我々インテリジェントは絶滅の危機に瀕していた。
しかも、それまでにほとんど時間の猶予はない。ヴァイスが攻めてきているのだ。

「現在の我々の領地はもといた極東の小さな島と、大陸にあるこの港町、あとはせいぜいその周りの街くらいだ。」

冥界地図中の右の方にちよろつと赤く領地が塗つてある。制覇率でいうと、多く見ても1%、おそらくゼロコンマの域だ。
これでも一応最初の領土は死守していて、港もちゃんと制圧してある。

とはいえ今までの戦闘での勝率はさらに低く、ほぼゼロとなっている。今まで何度となく戦闘をしてきたが、勝ったのは最初の三戦程度だ。

負けは続いていたが、港周辺はフォルテの奇策によって死守している。

「今回、敵の進行ルートはすでに予測できている。しかし、敵の数は我々の10倍近い。」

フォールンは港の西の街、ポートゲートのさらに西にある溪谷を指し示しながらそう言った。

「正面からぶつかっても無駄なことは今までの経験から分かっている。」

周りの悪魔達はあとため息をつく。
それもそのはずだ。フォルテに「真正面からぶつかっても無駄」などと言われてしまっただけはもうどうしようもない。

「そこで、今回は正面から攻撃しない！ 地形を利用して敵を一掃する…」

しかしため息をついた悪魔たちが今度は新しい作戦内容に興味を

示し、一気に辺りがざわつく。

フォルテはその反応を見ながらテーブルの上に木製の棒を数本置いた。

しかし、どうやらただの棒ではないようだ。数本のうちの一本は大きく反り曲がっており、その端と端を糸が繋いでいる。

「弓矢という武器だ。人間界で多く用いられている。これに少量の魔力を付与して致死性を高めて使う。」

「フォルテさん、少しいいか？ その武器は確かに強いかもしれない。しかし当たらなければ意味はないだろう？」

第3軍の長がそういって、他の長達も「そうだよな。」「などとざわつき始めた。

確かにその通りである。

どんな兵器を用いたとしても当たらなければどうということはない。

「だから地形を利用する。さっき言ったように、ポートゲートの入口は渓谷になっている。逃げ場はない。だから谷の上で待ち伏せて、ヴァイスが来たところでこの弓矢で死の雨を降らせるんだ。」

「魔法による攻撃はナシということか？」

「ああ。この弓矢という武器はそのままでも充分殺傷能力がある。」

しかし、殺す事ばかり考えないといけないとは。

世の中も悪くなったものである。しかしこの先悪くなるばかりだ。この戦闘で勝っても負けても、ヴァーチャーはまだ戦わなければならないのだから。

フォルテは自分が持ってきた弓矢をにらみ、つぶれそうなほど強く握りしめた。

「今度こそ絶対勝つ。島からは1万人ほど兵士を借りたい。手配してくれるか？」

各隊の隊長たちはひそひそと話しだしていた。

彼らがフォルテに指揮を任せただが、もうフォルテへの信頼もそこまで高くないのだ。

誰から見ても間違いなく島一番、もしかしたら地獄一の天才であるフォルテであるが、これだけ負け戦が続けば天才というのも全く意味がなくなってきたしまう。

しかし他の者に任せたとところでどちらにせよ勝機は見えないのだ。彼らは何があってもフォルテに従うしかない。

「島からこれ以上兵士を引き出す事が可能ならばそうしよう。しか

し、島にまだ男が1万人も残っているかどうか……」

「ならできるだけ集めてくれ。ただし無理強いはするな。内乱などが起きてはいけないからな。」

「無理強いをせずにとやっつて兵を集めると言うのか！ 島の現在の総人口は4万。うち3万近くは女、子供、老人だ。集まるわけがない！」

今までの戦いですでに2万もの兵士が死んでいる。もう島には兵士となる悪魔がほとんど残っていないのだ。

しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「ならボクが集める。ボクはもともと位も何もない平民だけど、いや、だからこそなんだってする。」

フォルテはそう言いながらテーブルを立ち去るのかと思ったが、彼は予想外の行動をとった。

「ボクに力を貸して下さい。ボク一人の力ではみんなを守りきれない。だから力を貸して下さい！」

そう言いながらみんなから見える位置で土下座をしたのだ。

「もう後には引けない。だからありったけの戦力が必要なんだ。」

各隊長はなるべく兵士を集めるようにする事を約束した。

〈数日後〉

「さあ！今日こそはヴァイス達に我らが正しい事を思い知らせてやるっ！」

「ボクは非戦闘員なので砦にいるが、君たちは直接ヴァイスと打ちあうことになるはずだ。」

「先に言っておく。真正面から向かっててもヴァイス相手では力負けする！無理に攻めようとするな。以上！」

その言葉と共にヴァーチャーがポートゲートへと行進を始めた。

1 - 1 作戦会議（後書き）

もうこういう頭使うのマジ無理だったww
なんでこんなので上げようと思ったんだろww

更新が遅れていたからである。

というわけで第一話始めました。

第三話までが第一章です。

第二章から女神が出てきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1508z/>

革命戦記 アルマゲマキナ

2011年12月19日23時52分発行